

高橋原・堀江宗正著『死者の力—津波被災地「霊的体験」の死生学—』岩波書店 (2021)

岩崎 美香 明治大学意識情報学研究所*

Takahashi Hara, Horie Norichika, *The Power of the Dead: Death and Life Studies of "Spiritual Experiences" in the Tsunami Affected Areas*

IWASAKI Mika



「死んだらどうなるのか?」「死後にも霊魂は存続するのか?」臨死体験の研究をしている評者は、このようなことを人から問いかけられることがしばしばある。しかし、そうした問いに答えることは容易ではない。ただ言えるのは、臨死体験をした人々は死後にも続く世界があると確信し、死を恐れなくなるなどの心理的な変化を生じることが多々あるということである。言い換えれば、臨死体験は体験者の生と死の物語を書き換えるような力を持った何かがあるということだ。

本書は、東日本大震災の被災地で報告が相次いだ死者との遭遇という霊的体験を「物語的現実」という観点から記述し分析を行った、気鋭の宗教学者による労作である。ここでは、死者との関わりをきっかけに生者の生きる力が引き出され、死者を包摂することによって共同体の統合力が高まるなど、文字通り「死者の力」が浮き彫りにされていく。

ちょうど12年前の2011年3月11日に起きた東日本大震災では、東日本の広範な地域での激しい揺れやそれに付随して発生した津波や火災によって、東北地方を中心に2万人余りの死者を出したという出来事はまだ記憶に新しい。東日

本大震災後、被災地で家族や大切な人を亡くした人々から「死んだらどうなるのか?」「死後にも霊魂は存続するのか?」という問いが、新たな形で切実に問いかけられるようになった。

そうした問いかけが高まったのは、震災の半年後ぐらいから津波の被害が大きかった地域で、震災で亡くなった人と遭遇するような霊的な体験が頻発したことも無関係ではない。

著者である、宗教学者の高橋と堀江は、それぞれ震災ボランティアで繋がりをもった地域の人々や被災地内外の宗教者との対話をきっかけに、被災地で死者と遭遇した霊体験の調査を始める。これまでも被災地での霊体験をテーマにした良書は他にいくつか出版されているが、本書のように宗教学者によって行われたインタビューや調査紙による総合的な本調査は注目に値する。

とかく日本の宗教学者には、死者気配体験や霊体験の研究に一般的に消極的な印象がある。高橋がユングの元型論を研究し、堀江もユング心理学に親しんでいるなど、彼らに「心的現実」へのアプローチの素地があったからこそ、このような形での研究が可能になったのであろうことを感じさせる。

ちなみに、死者が霊的な存在として実在するのかどうかという問題（「物理的実在論」）については、本書では否定も肯定もしないとい

* iwskmk007@ybb.ne.jp
明治大学意識情報学研究所
〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1
明治大学駿河台キャンパス蛭川立研究室気付

う立場が取られ、「心的現実」の類似概念である「物語的現実」からの記述や分析に貫かれている。死者の霊の物語的現実とは、「心理的な現実としての死者表象、死者イメージが、すでに物語として流通している死者表現として語られ、それを話すことを通してたち現れる死者の存在感presenceや実在感reality（なまなましさ）である。」（本書244頁）とされる。

本書で特に強調されているのは、この「物語的現実」としての死者の物語を媒介とした包摂性である。たとえば、被災によって家族や大切な人を喪った人々は、それらの親しい人の霊（「身近な霊」と再会し、絆を確認することによって、気持ちが前向きになり、新たに生きる力を与えている。また、こうした身近な霊とは異なり、被災で亡くなった見知らぬ霊である「未知の霊」との遭遇は恐ろしいものとして体験されるが、被災地の悲嘆共同体でこうした体験が傾聴され共有されることで、やがては「身近な霊」に準じた扱いに至るなど人々に包摂され、そのことがさらに共同体の統合力を高めることも示される。

被災地の霊体験を通して、社会的包摂性や死者と生者を貫く生命原理といった大きな視野に開かれていくことが本書の真骨頂であろう。

さて、話は変わるが、震災後に高まりをみせた「死んだらどうあるのか？」「死後にも霊魂が存続するのか？」という古くて新しい問いには、どのような答えやヒントが見出せるだろうか。というのも、本書を手取る人は、宗教学の研究者であれ、そうでない読者であれ、霊体験を取り上げているのならば、その点が知りたいという気持ちが多少なりともあるのではないかと考えるからだ。

被災地の共同体の中では、人々に現に生々しく体験され、それに関する多数の語り記録され蓄積されているのだから、そこにはそれなりの実在性を伴った現象が存在するのではないかと

と解釈することもできる。

また、死者の霊の「物理的実在論」に関して本書の中で否定も肯定もしないという立場を取っていた高橋と堀江も、あとかきの部分では、被災地での調査や研究の過程での体験や彼らの肉親の死を通過することによって、霊体験について「心的現実」以上の何かを感じ取ったことに触れているということも見逃せないだろう。

評者の私見ではあるが、サイキカル・リサーチ（心霊科学研究）の観点から、霊体験においてそれが体験者の人の幻覚ではなく客観性がある程度担保されているかどうかなどの点を踏まえて検討すると、本書での霊体験の事例はもちろん、震災後まもなく刊行された被災地の霊体験に関する出版物（奥野修司（1997）『魂でもいいから、そばにいて——3.11後の霊体験を聞く』、金菱清（ゼミナール）（2016）『呼び覚まされる霊性の震災学』）の事例の中には、死者の霊の実在性の可能性を考えさせられるものが散見される。被災地での生々しい体験を改めて示したという意味でも本書は興味深いとも言える。

ただし、注意しなければならないのは、死者の霊の物理的実在論を論じる時には、真の霊体験、錯誤の霊体験などの類別判定がつきものでもあるという点である。死者との絆を大切にしている心は変わらないのに、この体験は客観性に欠けるから錯誤の体験などと判断されたりしたら、親しい人に関する霊体験をした人はたまたま気持ちに駆られるかもしれない。そうになると、霊体験から死者を語ることによってもたらされた包摂性もどこへやらである。

今のところは、霊体験が心的現実にとどまらないという可能性について心を開きつつも、科学からの精密な検証は、死者を含み生きる道をつかんだ我々の心と社会の成熟を待った後でも遅くはないであろう。